

三 串本町所在の中世考古資料

北野隆亮

KITANO Ryusuke

佐藤純一

SATO Junichi

はじめに

今回、和歌山県南部における発掘調査等で出土した中世考古資料のうち、東牟婁郡串本町所在の未報告資料の調査を行った。串本町は、本州島最南端に位置し、日本列島の東西を結ぶ太平洋航路の結節点のひとつであり、古来より近代に至るまで海運の難所とされる潮岬半島を擁する町である。

串本町域においては大規模な発掘調査はほとんど行われておらず、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡は表採等を含めてよく知られていたが、中世期の様相については判然としていなかった。しかしながら、「熊野山上綱」と名乗る西向小山氏や二部小山氏、那智山尊勝院の一族である塩崎（潮崎）氏といった在地領主層による中世期の活動が文献史料よりみてとれる。今回、串本町所在の中世考古資料を報告することにより、串本町域の中世期の様相の一端を明らかにしたい。

なお、本調査における笠嶋遺跡出土遺物については、串本無量寺応挙芦雪館において展示されている。調査資料を含めた笠嶋遺跡出土遺物は、無量寺が串本町より寄託を受け、管理・展示している資料群となる。また、地藏道遺跡出土遺物については、串本町立文化センターで展示されている資料群である。（佐藤）

一 笠嶋遺跡と地藏道遺跡の位置と概要

笠嶋遺跡は、和歌山県立串本古座高校及び串本町立串本中学校の敷地内に位置する遺跡である（図1）。遺跡は、陸繋島である潮岬半島の地頸部にあたる砂洲上に立地しているが、周辺地形については、昭和二十年代以降の県立串本高校（当時）の校舎・運動場建設に伴う造成によって改変されている。笠嶋遺跡の発掘調査は、昭和三十五年（一九六〇）

と平成二年（一九九〇）に実施され、それぞれ発掘調査報告書が刊行されている〔安井編一九六九、（財）和歌山県文化財センター編一九九一〕。また、本発掘調査以外にも、校舎等の改築に伴う小規模な立会調査や試掘調査が実施されているようであるが、詳細は不明である。以下、各報告の記載に従い、調査内容を概述する。

昭和三十五年時では、運動場整備工事



図1 串本町関連遺跡位置図（国土地理院発行25000分の1加筆修正）

に伴い木製品や土器片が発見され、前年まで串本高校に勤務されていた伊勢田進氏（当時田辺高校教諭）の提言を受けて、串本町により「串本町笠嶋低湿地遺跡発掘調査会」が立ち上げられた。本調査会では、団長を同志社大学坂詰伸男教授、調査主任として同大学大学院の安井良三氏が務められ、調査員として伊勢田氏や高校の教諭が名を連ね、調査の補助として同志社大学学生や串本高校の学生の協力を得ている。

発掘調査は、昭和三十五年二月二十二日から三月十三日にかけて実施されている。報告書によると、土層や遺物の出土状況、遺構の検出がされなかったことから、潮岬台地上もしくは崖の中腹に位置する漁労を主な生業とする弥生時代から古墳時代初頭の集落が、天災（地震）により崩落した遺跡であると結論づけられている。また、最近の研究からは、弥生時代終末から古墳時代初頭の南海トラフ地震による津波被害の可能性が指摘されている〔瀬谷二〇一六〕。遺構は確認されなかったが、船材（船底板）をはじめとする多種多様な木製品や土器、自然遺物（魚類、貝類等）が出土している。

また、この発掘調査を契機に串本町文化財保護委員会が設立されたことは、町の文化財行政にとってひとつの画期となる出来事であった。平成二年時は、遺跡の東側に位置する串本中学校校舎建築に伴う発掘調査である。串本町からの委託を受けた（財）和歌山県文化財センター（当時）が調査を担当している。調査は、平成二年十月十七日から平成二年十二月十五日まで実施している。

本調査においては、合計八棟の竪穴式住居跡をはじめ、柱穴や溝、木棺墓の可能性がある土壙が検出されている。遺物としては、縄文時代晩期末から平安時代にいたる土器が出土しているが、その中心時期は、前回調査と同じく弥生時代後期から古墳時代初頭（庄内式併行期）となる。古墳時代から奈良・平安時代と時期差はあるものの、製塩土器も出土している。瀬戸内地域からと東海地域からの搬入土器が確認されてい

る。笠嶋遺跡は、弥生時代中期以降から古墳時代初頭にかけて海浜集落として存続していたが、自然災害により居住区としては放棄され、以後墓域に移り変わっていくという評価がなされている。

地蔵道遺跡は、昭和三十六年（一九六一）の国道四十二号線拡張工事と昭和三十七年（一九六二）の個人住宅整地工事中にいずれも不時発見されており、詳細な記録は残っていない〔串本町史編さん委員会編一九八八〕。

串本地区は、いわゆるトンボロと呼ばれる陸繋砂洲上に中心地が営まれている。その背後の丘陵（西ノ岡平見）から派生する小規模な舌状尾根に挟まれた谷状地形に本遺跡は立地し、その裾部から中腹部分にかけて、遺物が発見されている。串本地区と袋地区を結ぶ山越えの旧道沿いに位置し、袋坂とも呼ばれていたようだ。海側の南西方向に開口する谷状地形は、天然の良港である袋港の入り口を望む好立地である（図1）。昭和三十六年時には、中世期の瓦器・青磁・陶質土器のほか弥生土器・須恵器が出土しており、昭和三十七年時には、土師器・須恵器のほか、別の地点で中世期の陶質土器が出土している。弥生土器は、弥生時代中期の高坏脚部・甕・壺の破片で、須恵器は古墳時代後期の蓋坏や甕、飛鳥時代の高台付の坏が見つかっている。土師器の出土は小片で極めて少ないとされる。中世期の土器は、瓦器や青磁、陶質土器の小皿と片口水注が発見されている。『串本町史 史料編』には、古墳時代の須恵器蓋、飛鳥時代の坏身、片口水差形の陶質土器と思しき図版が掲載されている。（佐藤）

二 遺物の観察

笠嶋遺跡の中世のものとみられる出土遺物は、瓦器碗一点、瓦器皿二点、山茶碗の皿二点の合計五点がある。その他、図化は行わなかった

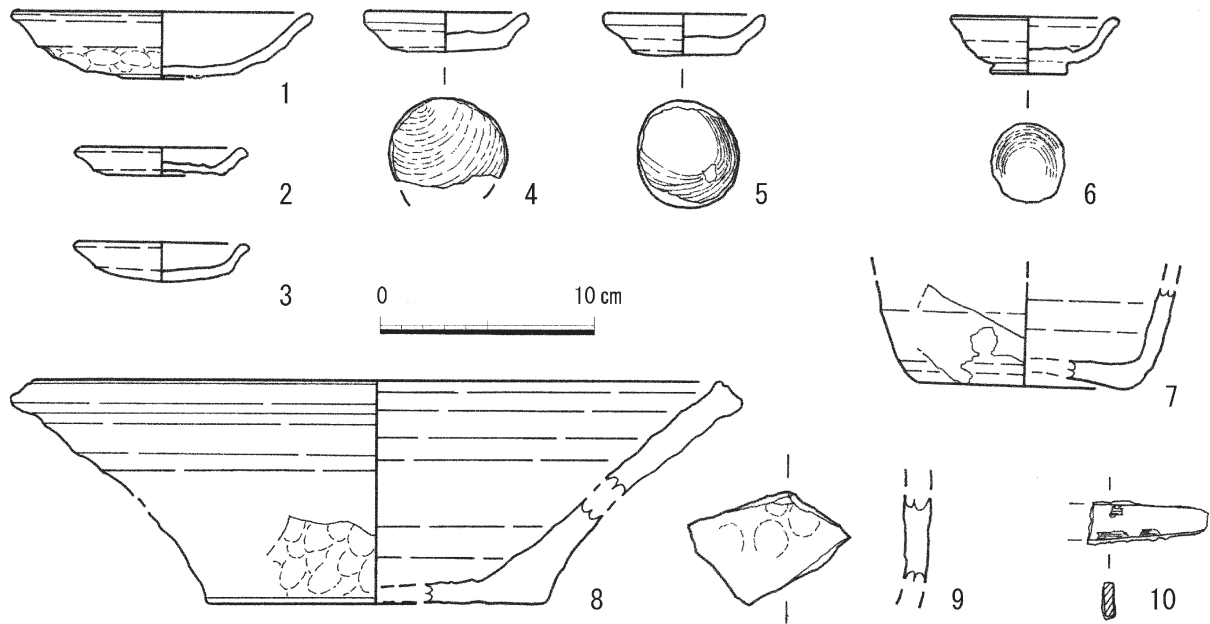


図2 笠嶋遺跡・地藏道遺跡出土遺物 実測図 S=1/4

1~5 笠嶋遺跡出土遺物 (中世期)
6~10 地藏道遺跡出土遺物 (中世期)

が、瓦質土器の足釜脚部の小破片を一点確認した。地藏道遺跡出土の中世遺物は、瀬戸・美濃系施釉陶器の仏供と壺が各一点、常滑焼の片口鉢と甕が各一点、鉄製刀子一点の合計五点を確認した。

以下、遺跡毎に遺物の観察所見を述べる(図2)。

1 笠嶋遺跡出土遺物

瓦器(1~3) 瓦器は、碗一点と皿二点の合計三点がある。三点とも、砂粒を含まない緻密な胎土を用いた点が共通する。

1は口径一四・〇cm、器高三・二cm、高台径三・六cmを測る碗である。色調は暗灰色で、完存品である。外面体部下半部に指頭圧痕が明瞭に残り、口縁部は横撫調整により端部を外反させている。高台は紐状の粘土を輪状に貼り付けたもので、輪は全周していない。暗文は外面には無く、内面に渦巻状暗文が僅かにみられる。以上の特徴から、紀伊型瓦器碗Ⅲ-2期に該当する。時期は十三世紀後半である。

2は口径八・〇cm、器高一・二cm、底径五・六cmを測る皿である。色調は淡灰色で、完存品である。底部は平底で、外面底部に指頭圧痕がみられる。口縁部は横撫調整により端部を外反させている。暗文はみられない。

3は口径八・〇cm、器高一・七cm、底径六・〇cmを測る皿である。色調は黒灰色で、口縁部の一部を欠き残存率九〇%である。底部は丸底で、押さえ調整で仕上げている。口縁部は横撫調整により端部をやや外反させる。暗文はみられない。

瓦器皿は二点とも、紀伊型瓦器碗Ⅲ期にみられるもので、瓦器碗と同期のものである。

山茶碗(4・5) 山茶碗は、皿二点がある。二点とも色調は灰白色で、胎土中に径一〜三mm大の砂粒を含む。底部は平底で、底面は回転系

切り未調整である。また、口縁部は横撫調整により端部をやや外反させる。

4は口径七・六cm、器高二・九cm、底径五・一cmを測る皿で、一部を欠き残存率は七〇%である。

5は口径七・二cm、器高二・九cm、底径四・七cmを測る皿で、完存品である。

これらは十三世紀代の遺物と考えられる。(北野)

以上の出土遺物については、串本無量寺応挙芦雪館に展示されている資料であるが、来歴を示す注記等はなく、「瓦器」というキャプションのみである(写真1)。同じ展示スペースにおいて、笠嶋遺跡ボーリング調査試料の土塊が展示されており、それに付随する資料と判断した。なお、平成二年時発掘調査報告書本文内において、串本高校の校舎改築に伴う数次の試掘調査で瓦器が出土していることが明言されている。(佐藤)

2 地藏道遺跡出土遺物

瀬戸・美濃系施釉陶器(6・7) 瀬戸・美濃系施釉陶器は、灰釉が施釉された仏供(6)と壺(7)がある。

6は口径七・四cm、器高二・七cm、底径三・四cmを測る仏供で、一部を欠き残存率は六〇%である。色調は灰褐色で、胎土は砂粒を含まず緻密である。底部は台底で、底面は回転系切り未調整である。皿部の口縁は横撫調整により端部をやや外反させる。口縁端部内外面に灰釉を施釉する。以上の特徴から、古瀬戸後期様式のⅢⅡⅣ期に該当する。時期は十五世紀中頃後半である。

7は底径九・四cm、残存器高四・八cmを測るもので、広口壺の底部破片とみられる。外側面から内面にかけて灰釉を施釉している。色調は施釉部が淡緑色、露胎部は褐灰色で、胎土は砂粒を含まず緻密なものであ

る。底面は回転系切り未調整であるが、上げ底状になっている。以上の特徴から、古瀬戸後期様式のものと考えられ、十五世紀代の遺物と考えられる。

常滑焼(8・9) 常滑焼は、片口鉢(8)と甕(9)がある。

8は口径三一・四cm、器高一〇・三cm、底径一五・四cmを測る片口鉢で、同一個体とみられる口縁部破片一点と底部破片一点を図上で復元した。色調は外面が暗茶色、内面は茶褐色、底面は暗赤褐色である。胎土中に径5mm以下の砂粒を多く含む。体部内面から口縁部外面上半部は横撫調整により仕上げられており、口縁端部に幅一・六cmの面を持つ。体部外面下半部には指押さえによる明瞭な指頭圧痕がみられ、底面は未調整である。以上の特徴から、常滑焼一〇型式に該当し、時期は十五世紀後半である。

9は甕で、最大長七・五cm×最大幅五・二cmを測る体部の破片である。器としては、残存高四・一cm、器壁の厚さ一・三cmを測る。色調は外面が暗褐色、内面は褐色で、胎土中に径5mm以下の砂粒を多く含む。外面は指押さえと撫調整、内面は横撫調整により仕上げている。焼成及び保存状況は良好である。(北野)

金属製品(10) 金属製品には鉄製の刀子がある。

10は鉄製刀子である。刃部・関部は欠損しており、茎部のみ遺存する。残存長五・五cm、最大厚〇・五cmを測る。背部と腹部の一部に、木質が確認でき、木製把が装着されていたとみられる。茎部は、やや甘い隔切り状を呈する。本資料のみで、時期比定するのは困難であるが、出土遺物中唯一の金属製品であるため、ここで報告しておく。

以上の出土遺物は、文化センター会議室の展示ケース内に弥生土器や須恵器の破片とともに展示されている。資料自体に注記等がなく、一括して地藏道遺跡出土遺物となっているため、昭和三十六年と昭和三十七年のいずれで出土したのか不明である。展示資料以外の地藏道遺跡出土

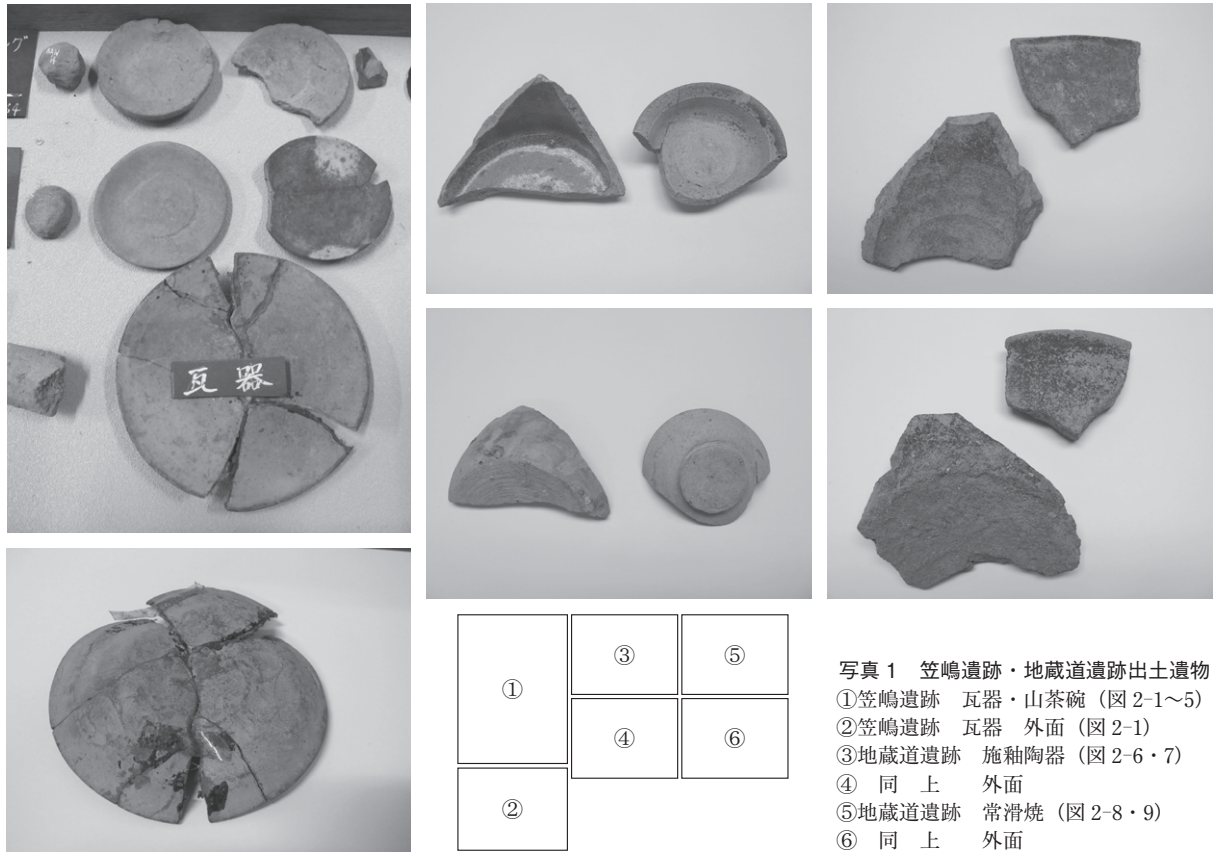


写真1 笠嶋遺跡・地藏道遺跡出土遺物
 ①笠嶋遺跡 瓦器・山茶碗(図2-1~5)
 ②笠嶋遺跡 瓦器 外面(図2-1)
 ③地藏道遺跡 施釉陶器(図2-6・7)
 ④ 同上 外面
 ⑤地藏道遺跡 常滑焼(図2-8・9)
 ⑥ 同上 外面

遺物の一部(弥生土器破片)は、旧赤瀬小学校(串本町和深)に保管されているが、今回の調査では『串本町史 史料編』に図面・写真の記載がある遺物三点の所在は確認できなかった。(佐藤)

三 串本町における中世遺跡の意義

串本町所在の二遺跡の中世遺物について、紹介した。いずれも出土状況に注意が必要ではあるが、これまで報告されていない貴重な資料群である。資料数の制約はあるが、紀伊半島を挟んだ東西双方からの土器類の搬入が確認できたことの意義について触れたい。

串本町域では、中世前期(十三世紀後半代)に紀伊型瓦器と山茶碗が同程度搬入し、中世後期(十五世紀代)においては、伊勢湾沿岸地域(瀬戸美濃系施釉陶器と常滑焼)の土器相となっている。今回は、十四世紀代に相当する遺物は確認されていない。

ここで調査成果が比較的蓄積されている紀伊半島南岸部の西部地域(日置川流域・安宅氏城館跡)と東部地域(那智川流域・川関遺跡)の出土土器相との比較をしたい。

日置川流域では、中世前期では東西双方の遺物が同程度確認できるが、中世後期になると西側、とくに瀬戸内東部地域からの搬入が多くなる。資料数は僅少であるが、南伊勢系土師器が出土しており、紀伊半島における分布の西限となる。一方、那智川流域では、一貫して伊勢湾沿岸地域からの影響が強い(朔和歌山県文化財センター二〇〇四)。ただし、十五世紀後半から十六世紀前半代にかけて、備前焼や播磨型土鍋といった瀬戸内東部地域からの搬入が急増していく。中世後期になると、東西の土器相の出土が拮抗とまではいかなくとも、伊勢湾沿岸地域の影響が相対的に少なくなるようだ[伊藤二〇一一]。いずれも、十四世紀代に入ると、出土遺物量が減退する傾向がみてとれる。

串本町域では、おおまかにいえば、中世前期は西部地域（日置川流域）、中世後期は東部地域（那智川流域）に近似するという漸移的な様相を示す。

これらの土器相の状況は、南北朝期以降（十四世紀～十五世紀代）にかけて、太平洋航路が停滞していた可能性が指摘されていることと軌を一にする。南北朝から室町期前半代では、東国とつながる紀伊半島東岸部、西国とつながる紀伊半島西岸部という評価がされている〔黒嶋二〇一九〕⁽¹⁾。その後、戦国期にいたり、太平洋航路の復調を示す史料が増えてくる。これは、十五世紀後半から十六世紀前半代に、紀伊半島南岸部に瀬戸内沿岸地域からの土器の搬入が増加する傾向と連動した現象と捉えられるのではないか。

瀬戸内東部地域からの代表的な搬入土器である備前焼は、間壁編年Ⅲ期（鎌倉時代末期～室町時代初頭）までは日置川流域（安宅氏居館跡）までしか分布しない。間壁編年Ⅳ期（室町時代前期～中期）には串本町域を越えて紀伊半島南岸部の東部地域まで分布しているが、量的には伊勢湾沿岸地域の土器より少ない。また、熊野川を越えるとさらに減少する傾向にある。そのほか表採資料であるが、虎松山城跡（串本町和深）でも、中世後期に比定される備前焼甕の体部片が確認されている。

今回報告した二遺跡の性格について詳細に触れることは難しいが、西から東にかけての漸移的な土器相を示すことは、あたかも「熊野」の境目を現しているといえるかもしれない⁽²⁾。しかしながら、今回はあくまでも予察的な評価となるので、今後の資料数の増加を待ちつつ、稿を改めたい。（佐藤）

おわりに

今回の資料報告では、一部の遺物に限っての紹介となってしまうた

が、笠嶋遺跡・地藏道遺跡の中世考古資料を広く公開することにより、これまで不透明であった串本町域の中世期の歴史の解明の一助になれば幸いである。

また、令和元年度に串本町有田の結城城跡の一部（結城城跡西麓部）が、（公財）和歌山県文化財センターにより発掘調査されており、中世期の遺構・遺物が確認されている⁽³⁾。詳細については、今後の調査報告書の刊行を待ちたい。（佐藤）

本報告にあたっては、串本町教育委員会の田村浩平氏、串本町文化財保護審議会の上野一夫氏、熊野古道大辺路刈り開き隊の神保圭司氏に、資料の閲覧・実測をはじめ、さまざまな便宜を図っていただいた。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

図1については、佐藤が作成した。図2については、北野・佐藤が実測し、北野がトレースしたものである。写真1は、北野が撮影した。

注

(1) 黒嶋敏氏の検討によると、東国の政治的・経済的な求心力の低下や太平洋航路の起点が伊勢湾に収斂していくことを要因として、室町期の停滞期を迎えるともみている。その後、戦国期に復調傾向にあるとされるが、具体的な状況は今後の課題としている。〔黒嶋二〇一九〕

(2) ただし、中世前期においては、「熊野」では山茶碗が瓦器碗を卓越するとの指摘がある。〔伊藤二〇一一〕資料数の制約から、これらについては今後の検討課題である。また、伊藤氏は紀伊半島東部を中心に「熊野」を検討されているが、近世に「口熊野」と称される地域（紀伊半島南岸部の西部地域）についての評価が今後必要となる。

(3) 本発掘調査に先立つ分布調査や試掘確認調査においても、中世の遺

構・遺物が確認され、瓦器、山茶碗、常滑焼、備前焼の出土が報告されている。〔和歌山県教育委員会二〇一八、二〇二〇〕

引用参考文献

- 伊藤裕偉 二〇〇七「南伊勢系土師器の分布」『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』岩田書院
- 伊藤裕偉 二〇一〇「聖地熊野の舞台裏」高志書院
- 黒嶋敏 二〇一三『海の武士団 水軍と海賊のあいだ』講談社
- 黒嶋敏 二〇一九「熊野水軍からみた中世後期の「列島再編」」熊野水軍のさとシンポジウム列島の中の熊野水軍』資料集
- 北野隆亮 二〇〇六「紀伊型瓦器碗の編年と分布」『中近世土器の基礎研究二〇』日本中世土器研究会
- 北野隆亮 二〇一九「備前焼流通からみた紀伊水道内海世界」『港津と権力』中世都市研究会編
- 串本町史編さん委員会編 一九八八『串本町史 史料編』第一法規株式会社
- 坂本亮太 二〇一六「熊野水軍小山氏をめぐる資料」『和歌山県立博物館研究紀要第二二号』和歌山県立博物館
- 白浜町教育委員会編 二〇〇四『八幡山城跡』
- 白浜町教育委員会・安宅荘中世城郭発掘調査委員会編 二〇一四『安宅荘中世城郭群総合調査報告書』
- 白浜町教育委員会 二〇一九『安宅荘中世城郭群総合調査報告書補遺編』
- 瀬谷今日子 二〇一六「紀伊半島南部串本町笠嶋遺跡における津波痕跡の検証―弥生時代終末から古墳時代初頭の南海トラフ地震について―」『紀伊考古学研究第一九号』紀伊考古学研究會編
- 中野晴久 一九九五「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 日置川町誌編さん委員会 二〇〇五『日置川町史 第1巻中世編』第一法規株式会社
- 藤澤良祐 一九九一「瀬戸古窯址群Ⅱ ―古瀬戸後期様式の編年―」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』瀬戸市歴史民俗資料館
- 間壁忠彦 一九九一『考古学ライブラリー六〇 備前焼』ニュー・サイエンス社
- 安井良三編 一九六九『南紀串本笠嶋遺跡』笠嶋遺跡発掘調査報告書刊行会
- 山下峰司 一九九五「灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 和歌山県教育委員会 二〇一八『和歌山県文化財調査年報―平成28年度―』
- 和歌山県教育委員会 二〇二〇『和歌山県文化財調査年報―平成30年度―』
- (財)和歌山県文化財センター編 一九九一『笠嶋遺跡―串本中学校校舎建築に伴う発掘調査報告書―』
- (財)和歌山県文化財センター編 二〇〇四『藤倉城跡・川関遺跡』